
とある王国に巡る運命(もの)

雨音 流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある王国に巡る運命もの

【Nコード】

N7591X

【作者名】

雨音 流歌

【あらすじ】

かつて在ったという戦乱が嘘のように安穩そのものの国、虹霞にじげん。国を統べる王族を筆頭に、討魔士たごし・呪術師まじ・龍使りゆうしか・調薬師てうやくし・万獣使ばんじゅうしかいなど数多の才知に長ける人々がそれぞれ集団を作って生活しているこの国で、もうじき今年度の全部族交流会が催される。

それは、歴史の循環サイクルが巡り戻ってきた日でもあった。

「さあ、始めましょうか」

01 討魔士、夕紀

「いつまで隠れてるつもりかな。私、早く帰って寝たいんだから手を煩わせないでくれない？」

それだけ言うと、少女は自分の半身くらいの長さはありそうな刀を床板に突き入れた。

「あ、あの…」

「おじさん、心配しないで。この床板って結構頑丈みだいだから、ちよつとやそつとじゃ家崩れたりしないよ。」

この家の家主である中年の男性にやや的外れなフォローを入れる少女。普通ならここで「このクソガキが。人の家に傷付けといてふざけたこと抜かすんじゃないか」とか言われかねないが、運良く男性は穏和な性質らしく、「寝室は破壊しないでおくれよ」と言った他は若干固い笑顔で黙って状況を見守ってくれている。とりあえず親父からの鉄拳（手刀だったり刀の鞘だったり、バリエーション豊富）は回避が決定したらしい。本当に良かった。あれは本当に痛くて、そのうち頭の形が変わってしまうんじゃないか…と割と本気で考えたりしてしまうほどだ。安堵のため息に併せて突き入れた刀に両手を添え、力を込めると同時に横方向に掻っ切る。

数秒間の不気味な間の後、真っ黒い大型の魃いたちみたいな妖魔が軒下からヌツと顔を出した。

「よし、来たな」

紅い瞳でジツと視線を向けてくるそれに挑発的な笑みを返し、

「よ…っ」

華麗な空中回転で外へ躍り出、ポケットから笛を取り出す。妖魔の

気を引き、この家から離そうという作戦だ。程無くして高い音で笛が唄い始める。と、予想通りすぐに妖魔がこちらを向いた。

「おーい、こっちだよー」わざとらしい声で呼び、少女は家の裏手にある森林に向けて悠々と歩き出す。すると妖魔は低く唸り声を漏らし
追い風でも受けたかのような物凄いスピードで向かってきた。しかし、少女がそれしきの事で動じることはない。

「そうそう、全力で来てくれなきゃ面白くないよ」

『達観』という言葉がよく合う、少しの乱れもない口調と表情、揺るがない眼光で前を見据えたまま呟く。少しして少女は歩みを止め視線を上げた。それは注連縄しめなわを張った一本の大木。

「……………他者ひとに手助けして貰うのは好きじゃないけど、仕方ないか
…」

ため息と同時に腰のベルトに引つ掛けていた鞘から、今度は小刀を抜き取る。これは斬撃ざんげに用いるのではなく、妖魔の浄化用に打たせた、特別な刀だ。

「退治屋、夕紀ゆきの名の元に命ず。神宿る樹いっまき、その体ていに秘める浄めきよの御力みちから、我が内うちに貸し添えよ。」

少女　夕紀はつきりとした口調で呪詞まじことを唱え、小刀をかざした。

すると、白い刀身が紅と朱色を混ぜたような色の光に包まれた。網膜に鮮明に訴えてくる光に目を細める。しばらくすると光は細くなってゆき、やがて完全に消えた。…そして、それと同時に妖魔の爪つめが空くうを引つ掻く音が。

「うおっと…!!」

瞬時に左腕で受ける。そして間髪入れず峰打ちを食らわした。妖魔が怯んだ隙に体制を立て直し、腕の具合を確認する。鋭い衝撃で袖

口から腕にかけてが破れてしまったが、とりあえずは掠り傷程度で済んだようだ。

「…さて、それじゃ最後いきますか」

言うや否や夕紀は先ほどの小刀を取り出し、振り上げて「今すぐ君を解放してあげるからね。」

迷い無く振り下ろし、妖魔 甬の中に潜んでいた妖魔を討った。

「お、夕紀早かったじゃん。お疲れさん」

村に戻ってきた夕紀に、不意に声が掛けられた。少し視線を上げると、半袖シャツを肩まで捲り上げ黒髪短髪をタオルで掻き回している、比較的端正な顔立ちの男子が夕紀の右手にある家の窓から少し身を乗り出すような格好で笑っていた。彼は幼馴染みだ。大方、ついさっきまで剣術の訓練でもしていたのだろう。

「うん。そっちもお疲れ様、暁。…シャワー浴びたらちゃんと髪乾かしなよ。風邪引くよ?」

まるで母親みたいなことを言う夕紀。対する暁は、「平気だよ。…つくしよいッ」

平気と言った傍からくしゃみをしていては説得力の欠片もない。思わず爆笑しそうになって慌てて口を紡ぐが、声が少し漏れてしまった。

「…つたく、笑ってんなよな。…あ、そうだ。さっき夕紀のお父さんが夕紀に話あるとか言ってたよ。行った方が良くないじゃね?」

「…は?今日はまだ何も悪さしてないんだけど」

夕紀の口調に僅かに刺々しさが生まれる。

「『今日は』って…いつも悪さしてるのかよ。まあお前ならやりそ
うだけど」

「……ナンダッテ？」

ジロリと睨を見上げる。睨は透かさず「悪い、失言だった」と言っ
たが、目が限り無く爆笑に近い形に細まっている。絶対真面目には
謝っていない。

「おい睨、この私を舐める奴には漏れなく天罰を」 「下され
るのはお前だ、こんのバカ娘！！」

怒号と共に夕紀の脳天に拳骨げんこつが落とされた。

「痛っ……何しやがんだクソ親父イっ！！」

痛さの余り目尻を潤ませつつ、後方を射殺さんばかりの眼差しで睨
む夕紀。しかし、その眼差しを向けられた夕紀の父も負けてはいな
い。

「お前、『帰ったら速やかに任務完了報告をしろ』と何度言えば解
るんだ！このバカ娘」

「あん？ゴチャゴチャうつせえなクソ親父。私は今疲れてんの。帰
って早々苛つかせん。失せろ。」

夕紀が平然とそう言い放った瞬間。夕紀の父の表情が引き攣り、額
に血管の筋がうつすらと浮かんだ。

「…あ
」

直感的に何かを悟ったのか、睨の口からその声が漏れた、次の瞬間。

「夕紀……いい加減にしろこのバカ娘がア……！！」

夕紀の父が遂に本気でキレた。ついでに鞘に収めていた刀を取り出
し、「お前のそのひねくれた根性、俺が一から叩き直してやる。覚
悟しろっ！！」

事もあろうに実の娘に刀を向けた。そして夕紀はというと「おっ、
良いねえ」。私も丁度特訓したかった所だよ。「そんなことを笑顔

で言つて、父と同じく刀を抜く。夕紀も夕紀だが、夕紀の父も大人気ない気がしなくもない。まあ、これも親子のコミュニケーションの一つみたいだし、別に良いんだけど。

「警備人に乱闘騒ぎと思われぬ内に終わらせときなよ。」
まあ、二人の親子喧嘩は最早妖魔退治屋の集落地の毎日名物であり、警備人にも既に黙認されているのだけど。

込み上げる笑みを隠すように暁は後ろを向いた。直後、堪えきれず押し殺した笑い声が漏れたが、同時に刀が交差する高い音が鳴り響いたのに打ち消され、運良く喧嘩っ早い幼馴染みの耳に届くことは無かった。

二十分後。本日の退治屋集落の名物公開は、いつの間にか出来ていた野次馬の波を掻き分けてやってきた母親の「二人共、今日も元気一杯ね〜。」の一言と満面の笑顔によって強制終了させられた。父とは違って自分のやることに口出しは殆どせず見守ってくれる、いつもにこやかで穏和な母親だが……今は、そのにこやかさが畏怖の念を倍増させる。

「夕紀ちゃん、お父さん、終わった？」

先程の手合わせで巻き起こった土埃が酷く付着してしまったプロック塀を磨きあげたり、酷く汚れた服を洗濯したりとそれぞれ後処理をしている父と夕紀に、変わらず笑顔の母親が問いかける。

『もう少して終わります…』

「そう。やっぱり二人は頼りになるわ。」

満足げに頷く母親。何だか、この人には一生涯掛けても敵わない気がする。

「あ、夕紀ちゃん。ちょっとお願いがあるんだけど…お父さんから聞いた？」

「へ？えと…何を？」

首を傾げてみせると母親は一瞬、父親を一瞥。父親は若干青ざめ、手を合わせて必死に許しを請い始めた。夕紀には尊大な態度を取っているが、最強なのは母親のようだ。普段から薄々気付いてはいたけど。

「お願いって何？」

問うと母親は視線を夕紀に戻し、「今度、国主宰の全部族交流会が

あるじゃない？それに際して、各部族の長が代表して今日王族の方々と謁見する事になってるんだけど…お父さんもお母さんもちょっと、用事が出来ちゃって行けないの。だから夕紀ちゃんが行ってくれないかな？」

「はあっ？何で私が？しかも王族と謁見って。」大体、そんなものに参加したら「身分制度とかつまらない事を強要されそうじゃん。私、そういう無理。」

「どうか、そう言わずに…」母親は困ったように笑う。この謁見は交流会についての相談会でもあるから、夕紀には絶対に行って貰わなければ困る。だが彼女はかなり強情な性格。さて、どうしたものか…。考えを巡らせていた、その時。母親の脳裏にいつも夕紀が暇さえあれば本人(?)の意思に関係無く散歩に連れ出している、クリーム色の体と淡紅色の瞳を持つコリーに似た犬の姿が浮かんだ。

「…それに、さすがに夕紀ちゃん一人では危ないから紅霞こうかが付いていってくれるって…。」
まあ、本人(犬)には聞いていないけど。多分了承してくれるだろう。というか了承してくれなければ困ったことになる。

「紅霞が！じゃあ行く！」
満面の笑顔で夕紀は即答した。

同じ頃。ここは、虹霓国こうげいの王宮廷、光架城みつか。その最上階の、ある一室。

「ねえ、マジで俺が公務やらなきゃいけないの？はあ〜めんどくせ…。」

緋色の椅子の背もたれに身を預け、大理石の机に組んだ両足を乗せるといふ、王宮人おうきゅうじんに似つかわしいとはお世辞にも言えない格好をしているが顔立ちはよく整った少年が、電子端末を弄りながら不満を

口にしていた。

「申し訳ありません昂哉様（こびさ）…ですが王様のご様子が芳しく御座いませんで…。」

質は良さそうだが質素な紺色のロングスカート、恐らく下働きの身と思しき女性は申し訳無さそうに瞳を伏せ頭を下げる。少年は肩をすくめ「へいへい、解ったよ。その代わり明日の公務（しごと）は免除（チャラ）にして」。

「え…っ」

「…駄目なの？」

女性を見つめる少年の瞳には、捨てられる寸前の子犬が向ける眼差しのような、猛烈に保護欲をくすぐられる何かがあった。

「あ、えと…私が口出し出来ることではないので…。」

言葉を紡ぐ間にも少年の瞳は潤いの度合いが増してゆく。明らかに演技なのだが、少年のウル目に心を揺さぶられ、女性は全くそれに気付いていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7591x/>

とある王国に巡る運命(もの)

2011年10月22日02時15分発行